

做塔七部集注解

附阿  
名



荷分、尾陽、蒲士

山を武在馬名吉屋

兼名所位

遊たハ誓因のたけを

云

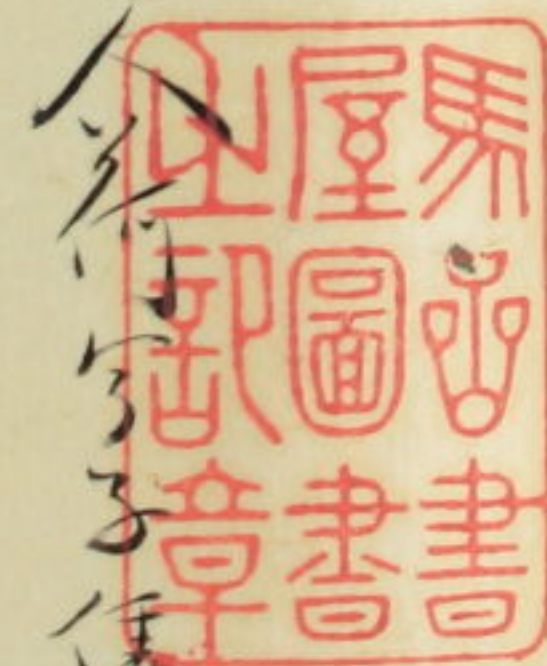
田詠

あされけしうのそ

のけしうのそ

こけしうのそ

尾陽をた樞本堂



名をたけしうのそ何れははなを

たけしうのそ何れははなを

けしうのそ何れははなを

たけしうのそ何れははなを

けしうのそ何れははなを

たけしうのそ何れははなを

けしうのそ何れははなを



卷之四

初秋 仲秋 暮秋

卷之五

初冬 仲冬 歲暮

卷之六

雜

卷之七

名不 旅述 懷忘 無常

卷之八

釋教 神祇 祝

負外

曠野集卷之一

和名抄

翁

ひ

ひ

曠野集卷之一

花三十句

の

これをもくし

ふみま

し

そのい

と

貞空

路通

信徳

晨風

友五



ナリト  
偷安 俗ニ云  
ユキナリ也

言社<sup>イハ</sup>の<sup>ノ</sup>後<sup>ノ</sup>後<sup>ノ</sup>

柿<sup>コノ</sup>子<sup>ノ</sup>

和名抄 柿<sup>コノ</sup>子<sup>ノ</sup>同

花<sup>ハナ</sup>の<sup>ノ</sup>香<sup>ノ</sup>は<sup>ハ</sup>こ<sup>ノ</sup>つ

心<sup>ココロ</sup>の<sup>ノ</sup>苗<sup>ノ</sup>は<sup>ハ</sup>こ<sup>ノ</sup>つ

誠<sup>マコト</sup>人<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>心<sup>ノ</sup>苗<sup>ノ</sup>は<sup>ハ</sup>こ<sup>ノ</sup>つ

水<sup>ミヅ</sup>の<sup>ノ</sup>味<sup>ノ</sup>は<sup>ハ</sup>こ<sup>ノ</sup>つ

松<sup>マツ</sup>の<sup>ノ</sup>皮<sup>ノ</sup>は<sup>ハ</sup>こ<sup>ノ</sup>つ

文<sup>フミ</sup>の<sup>ノ</sup>筆<sup>ノ</sup>は<sup>ハ</sup>こ<sup>ノ</sup>つ

舌<sup>シタ</sup>の<sup>ノ</sup>味<sup>ノ</sup>は<sup>ハ</sup>こ<sup>ノ</sup>つ

酒<sup>サケ</sup>の<sup>ノ</sup>味<sup>ノ</sup>は<sup>ハ</sup>こ<sup>ノ</sup>つ

月<sup>ツキ</sup>の<sup>ノ</sup>影<sup>ノ</sup>は<sup>ハ</sup>こ<sup>ノ</sup>つ

あ<sup>ア</sup>の<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>心<sup>ノ</sup>苗<sup>ノ</sup>は<sup>ハ</sup>こ<sup>ノ</sup>つ

檀<sup>タン</sup>の<sup>ノ</sup>香<sup>ノ</sup>は<sup>ハ</sup>こ<sup>ノ</sup>つ

抄字二十句

こ<sup>コ</sup>の<sup>ノ</sup>心<sup>ノ</sup>苗<sup>ノ</sup>は<sup>ハ</sup>こ<sup>ノ</sup>つ

水<sup>ミヅ</sup>の<sup>ノ</sup>味<sup>ノ</sup>は<sup>ハ</sup>こ<sup>ノ</sup>つ

松<sup>マツ</sup>の<sup>ノ</sup>皮<sup>ノ</sup>は<sup>ハ</sup>こ<sup>ノ</sup>つ

杜亨字句

竹向三原集

同... 初向... 草木

い... 中... 約宮

堀... 竹... 越人

ね... 口... 松下

あ... 竹... 音

あ... 竹... 柳

あ... の... 景

あ... の... 景

あ... の... 島... 崖

あ... の... 竹... 落

あ... の... 竹... 一

あ... の... 竹... 同

あ... の... 景

あ... の... 竹... 風泉

あ... の... 竹... 杏

あ... の... 竹... 亭

あ... の... 竹... 亭

あ... の... 竹... 亭

あ... の... 竹... 亭

あ... の... 竹... 亭

あ... の... 竹... 亭

あ... の... 竹... 亭





三磨所製  
月...  
月...  
月...

長  
他  
越人  
文  
昌  
水  
下  
水

水  
何  
日  
主  
胡  
雪  
一

十三夜

新秋の夜きよぬ静るる月夜は

杉風

朝日

美らけり月夜は静るる海の家

信方

二日

月夜は静るる月夜は

合

三日

月夜は静るる月夜は

大友

月夜は静るる月夜は  
月夜は静るる月夜は  
月夜は静るる月夜は

四日

月夜は静るる月夜は

小枝

五日

月夜は静るる月夜は

一泉

六日

月夜は静るる月夜は

静方

七日

月夜は静るる月夜は

一泉

雪二十句

大はし

自然居士の徳

形次政の由教の

ゆりきりていし

いこらにき再第

かやに凡北の印名

雪のやち形次政の由教の色  
 雪のゆきいさるんは時よふを  
 竹のやち形次政の由教の色  
 かさふちやさるんは時よふを  
 車通をながるふこのあふれ  
 越人

三句  
 三句  
 三句  
 三句  
 三句  
 三句

雪二十句

雪のやち形次政の由教の色  
 雪のゆきいさるんは時よふを  
 竹のやち形次政の由教の色  
 かさふちやさるんは時よふを  
 車通をながるふこのあふれ  
 越人

足幸  
 松芳  
 二水  
 危仙  
 除風  
 雪行  
 今下  
 雪川



家... 神の... 神の... 神の...

大和... 伊勢... 伊勢... 伊勢...

大和... 伊勢... 伊勢... 伊勢...

伊勢... 伊勢... 伊勢... 伊勢...

伊勢... 伊勢... 伊勢... 伊勢...

伊勢... 伊勢... 伊勢... 伊勢...

かき... 神の... 神の... 神の...

元... 神の... 神の... 神の...

え... 神の... 神の... 神の...

島... 神の... 神の... 神の...

妙... 神の... 神の... 神の...

水... 神の... 神の... 神の...

伊... 神の... 神の... 神の...

と... 神の... 神の... 神の...

ま... 神の... 神の... 神の...

小... 神の... 神の... 神の...

と... 神の... 神の... 神の...

ふ... 神の... 神の... 神の...

ね... 神の... 神の... 神の...

月... 神の... 神の... 神の...

つ... 神の... 神の... 神の...

う... 神の... 神の... 神の...

神の... 神の... 神の...

胡及

一斤

的亨

同

舟泉

元廣

昌福石

同

龜河

藤橋

水行

一矢

路通

一品



望遠...  
初

遠名...  
初

あつて...  
初

あつて...  
初

あつて...  
初

あつて...  
初

あつて...  
初

あつて...  
初

あつて...  
初

あつて...  
初

あつて...  
初

あつて...  
初

あつて...  
初

あつて...  
初

越人

同

今

同

同

般高

貞室

初

あつて...  
越人

あつて...  
水

あつて...  
俊似

あつて...  
小春

あつて...  
藤羅

あつて...  
素秋

あつて...  
玄空

初春



新編  
おへん  
を

有 梅の香 政

志 越人

茶 梅の香

梅 一

梅 梅の香

梅 梅の香

綱代民

梅 梅の香

新編  
綱代民

若 若

梅 梅の香

梅 梅の香

梅 梅の香

梅 梅の香

梅 梅の香

梅 梅の香

梅 梅の香



同

まの由すゝとほてゆよ

龍潭

白尾鷹

ちやゆきの飛つるあゝ白尾山

明水

陸の井田まき由まきとと

十一  
奇生

まのまりりとと入入るる白尾山

十一  
飛脚

すすししとと鏡鏡子子揚揚るるほほしし

舟泉

ままここくくとと揚揚ちちつつちちややとと筆筆

尖角

翁曰おれは白尾  
鳥かまはたか  
一ふしを待たれ

すすししととかかののああららとと土土字字

花笠

大大橋橋ちち揚揚ちちととくくままつつとと

塩東

川川舟舟ややままととののつつららとと子子

冬文

ほほくくとと紙紙巾巾ちちややとと筆筆

冬江

園古の主人

翁

筆下

園古の主人  
王義之の  
上りて事ハ書分  
列傳あり

池池とと柳柳所所 浪浪名名まままま子子柳柳陰陰 春春寺寺

けりしものよりの  
三味を

風の吹方を後の柳々丸  
何るしやとるり橋止  
さし柳きくあふちやりし  
天をうらむやたきゆの柳止  
さくれく柳を風よる  
あつちを花をささる柳止  
さされと心ゆりのゆきぬ柳止  
けりしものよりの柳止  
此橋  
那水  
遊人  
一笑  
小春  
一笑  
昌珮石  
杏雨  
此橋

吹流の舟のつぎさく柳止  
あつちを花をささる柳止  
風ふらふりしをささる柳止  
いそりしあつちをささる柳止  
さされと心ゆりのゆきぬ柳止  
さし柳きくあふちやりし  
天をうらむやたきゆの柳止  
さくれく柳を風よる  
あつちを花をささる柳止  
さされと心ゆりのゆきぬ柳止  
けりしものよりの柳止  
此橋  
杏雨  
松亭  
校遊  
荷亭  
全  
素秋  
鷗亭  
生林

仲春

麦の折さす葉のさくは春山 不悔

葉の折るや杉葉のさすは春山 長虹

ふりつるの夜交るるは春山 幸下

叶の折る時を知らぬは春山 清洞

~~~~~ 入して知らぬは春山 玄道

万葉をばはまてくるは春山 昌碧

~~~~~ 折るは春山 越人

預夜を一をさすは春山 笑子

~~~~~ 葉のさすは春山 除風

~~~~~ 折るは春山 一橋

~~~~~ 折るは春山 冬村

~~~~~ 折るは春山 一筆

~~~~~ 折るは春山 明水

~~~~~ 折るは春山 除風

~~~~~ 折るは春山 一書

仲春

作向し









曠野集卷之三

初夏

こぼれゆく白くも物さあつて

路色

更衣襟もけしきわたりき

傘下

くらもく口せさーこつ人さし

鼠弾

有物老人のちりたりり山と字  
まをまつあふむせりまみ解とれ  
はしし冷の影越人おれをまれれ  
明しつゝあまのれみ解のしつる

空を焼くもあしくくらもか

荷子

初夏

こぼれゆく白くも物さあつて

たそがれ  
けさのせのせ  
石川太山  
像  
凡そとお談  
世つらくも  
こぼれゆく白くも物さあつて  
こぼれゆく白くも物さあつて  
こぼれゆく白くも物さあつて

石井 貞子 秋葉の

吹しなむ地

一葉の一葉を

先 経年

一八の佳月

まじりて

まじりの

まじりて

まじりて

山歌

なむをいひてしむる山歌のしらけ

いさむらひの山歌のしらけ

柿の木の山歌のしらけ

切らぬ山歌のしらけ

山歌のしらけ

山歌のしらけ

山歌のしらけ

まじり

一舟

越之

不文

友死

起洞

竹洞

清くはるる山歌のしらけ

さけしやわりの山歌のしらけ

とらぬ山歌のしらけ

山歌のしらけ

山歌のしらけ

山歌のしらけ

山歌のしらけ

山歌のしらけ

山歌

山歌

山歌

山歌

山歌

山歌

山歌

山歌

色市

川一 勢をたよる言をいんるりた

李桃

大 頼れ雨さききん 川一のた

喜巡

そまきしん 四入を拾いぬりて

吉次

深川のたし

辰の 初みしん ぶあわし

嵐雪

さしー とうきん みるたさ

那水

仲夏

ちのらりしん せよみん 川一

元輝

と木の 屋をよ  
酒の 旨い 後 上 町 下  
しん 川 一 辰 井 を 依  
る  
宗 持 同 所 連 取 所 也

カノラカ

和泉の

らら さい とう ち ね ね  
しん 入 たり なる こと  
しん せ じ しの 月

川一 勢をたよる言をいんるりた

一葉

大 頼れ雨さききん 川一のた

石文

そまきしん 四入を拾いぬりて

風留

辰の 初みしん ぶあわし

吉江

さしー とうきん みるたさ

倉崎

ちのらりしん せよみん 川一

卜枝

らら さい とう ち ね ね  
しん 入 たり なる こと  
しん せ じ しの 月

馬安

とら さい とう ち ね ね  
しん 入 たり なる こと  
しん せ じ しの 月

仲夏





をむつと比嬌こ  
あつたかきし  
枕多しのこもふと  
ふこころ

かきしぬるあり  
かきしぬるあり  
かきしぬるあり  
かきしぬるあり

秋のつらさ  
白き秋の都  
むら

卯秋中の一はふふふ  
かきしぬるあり  
かきしぬるあり

すむつと比嬌こ  
かきしぬるあり  
かきしぬるあり  
かきしぬるあり

かきしぬるあり  
かきしぬるあり  
かきしぬるあり  
かきしぬるあり

かきしぬるあり  
かきしぬるあり  
かきしぬるあり  
かきしぬるあり

かきしぬるあり  
かきしぬるあり  
かきしぬるあり  
かきしぬるあり

かきしぬるあり  
かきしぬるあり  
かきしぬるあり  
かきしぬるあり

かきしぬるあり  
かきしぬるあり  
かきしぬるあり  
かきしぬるあり

暮文

かきしぬるあり  
かきしぬるあり  
かきしぬるあり  
かきしぬるあり

又本

川中の夜は  
かきしぬるあり  
かきしぬるあり

人のや  
かきしぬるあり  
かきしぬるあり

かきしぬるあり  
かきしぬるあり  
かきしぬるあり

かきしぬるあり  
かきしぬるあり  
かきしぬるあり

かきしぬるあり  
かきしぬるあり  
かきしぬるあり  
かきしぬるあり

かきしぬるあり  
かきしぬるあり  
かきしぬるあり  
かきしぬるあり

かきしぬるあり  
かきしぬるあり  
かきしぬるあり  
かきしぬるあり

かきしぬるあり  
かきしぬるあり  
かきしぬるあり  
かきしぬるあり

かきしぬるあり  
かきしぬるあり  
かきしぬるあり  
かきしぬるあり

かきしぬるあり  
かきしぬるあり  
かきしぬるあり  
かきしぬるあり

かきしぬるあり  
かきしぬるあり  
かきしぬるあり  
かきしぬるあり

かきしぬるあり  
かきしぬるあり  
かきしぬるあり  
かきしぬるあり

暮文







白鷺

白鷺  
月夜  
いんげん  
あま

朝霧のしほきさくさくし

あま

花や垣のやしのをふさ

文解

あまのこゝろ白鷺のあま

あま

あまのこゝろ白鷺のあま

朝霧のしほきさくさくし

同

花や垣のやしのをふさ

鷗宗

あまのこゝろ白鷺のあま

胡及

あまのこゝろ白鷺のあま

龍弾

あまのこゝろ白鷺のあま  
あまのこゝろ白鷺のあま  
あまのこゝろ白鷺のあま  
あまのこゝろ白鷺のあま  
あまのこゝろ白鷺のあま

秋風やあまのこゝろ白鷺のあま

あま

あまのこゝろ白鷺のあま

昌長

あまのこゝろ白鷺のあま

踏汗

あまのこゝろ白鷺のあま

一髪

あまのこゝろ白鷺のあま

素秋

あまのこゝろ白鷺のあま

あま

あまのこゝろ白鷺のあま

中角

あまのこゝろ白鷺のあま

舟泉

後片  
信事を忘るよの同の  
ゆきゆき 卯丸を忘れ  
てあけうらうら

任口伏見

西山岸の任口

えり

連歌を連歌

連歌を連歌

連歌を連歌  
連歌を連歌  
連歌を連歌

ひよわしと松ありや也  
を

桐地をくくえま  
印を漏る  
不知

まらふくく  
かぬも  
子花中  
伏見  
任口

をいそれそ  
瓜を  
藤  
花今

の人や  
地を  
くく  
胡及

卓然法師の

名  
り  
ぬ  
も  
咲  
地  
菊  
小  
孝堂

と  
く  
の  
ぬ  
れ  
に  
う  
き  
藤  
地  
俊似

ま本

ま本

仲秋

ま本  
ま本  
ま本  
ま本

つ  
く  
し  
乃  
ち  
上  
馬  
の  
ま  
ま  
ま  
ま  
秋  
を  
言  
ま  
ま

つ  
く  
し  
総  
を  
ん  
の  
秋  
の  
麻  
地  
小  
春

谷  
川  
や  
茶  
袋  
ま  
ま  
秋  
の  
丸  
蒼  
音

石  
の  
ま  
ま  
ま  
ま  
ま  
ま  
秋  
の  
言  
傘  
下

首  
の  
ま  
ま  
ま  
ま  
ま  
ま  
秋  
の  
言  
ト  
枝

庭  
の  
ま  
ま  
ま  
ま  
ま  
ま  
白  
え  
ま  
ま  
ト  
枝

甲  
の  
ま  
ま  
ま  
ま  
ま  
ま  
秋  
の  
言  
一  
泉

仲秋

林間燧酒

焼酒

了念院

蔵造の吉子

たのめ

山崎の酒

きと

おまふもた

キ角

あふめ

左順

二枚の

林守

と

越水

ワ

山和

た

山枝

た

山枝

え

て

け

け

た

て

我人

一

防川

た

舟泉

た

胡及

た

院

た

女角

て

た

女角

け句きききききき  
初あはあはあは

みよの心の秋風  
はよふけそふり  
あふくふり

坊き院南院  
そふり

かーのし

あふくふり

いそがわ

一矢

暮秋

あふくふり

巴丈

あふくふり

昌碧

あふくふり

超人

あふくふり

あふくふり

院院

あふくふり

あふくふり

あふくふり

あふくふり

あふくふり

あふくふり

女角

あふくふり

あふくふり

同

あふくふり

あふくふり

水

あふくふり

あふくふり

子

あふくふり

あふくふり

夕

暮秋

強々 於あしひきししよら書梅娘 加生  
河の終中まよと長うらと衣 踏面

曠野集卷之五

初又て

上ノミ  
端緒

天地の何りん風  
とそとたゆも  
とそとたゆも

あえつらのえ外引くゆ 河内外 湖春

あふらんアアきーきー

三斗の徳  
つらむとつらむ  
とそとたゆも

一夜まで三斗をさす 初一丸 尚白

人のしつと  
まふと  
まふと

とらー丸 何れもむす け 子 端水

一口白真り

ふーとあふ人のやま 丸 丸 丸 荷守

初冬

人を待つるかな

香雪の月 二の月と  
 吹雪のしし 御まは  
 ありし ちりしりし  
 かけし 足跡 日さるる  
 句 二の月と 二の月  
 必す こそ名目と 詮け  
 させし せんか  
 これまま 風うち  
 ありし せんか  
 せんかの 懐 知  
 司の 園と 時 活  
 焼 羊子 柿中を 宿火  
 後 まら せんか

|       |      |    |    |
|-------|------|----|----|
| けさきとる | こえけら | らん | せん |
| ゆ     | ゆるみ  | 下  | ゆ  |
| は     | わ    | ふ  | ふ  |
| こ     | か    | と  | ふ  |
| 一     | 二    | 三  | 四  |
| 此     | 批    | の  | は  |
| 同     | 同    | 一  | 同  |

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| さ | た | か | い | な | ま | は | ら | り | か | の | た | ん | の | あ | り | た | れ | ば | は |
| 李 | 明 | 水 | 昌 | 碧 | 今 | 一 | 井 | 落 | 格 | 胡 | 及 | 文 | 毓 |   |   |   |   |   |   |

雪の中は氷もあついで  
ついでと早の道も  
おもしろい事とけり  
おもしろい事とけり  
同じからまへ

ゆふゝに雪は純く  
あついでと早の道も  
おもしろい事とけり  
おもしろい事とけり  
同じからまへ  
ゆふゝに雪は純く  
あついでと早の道も  
おもしろい事とけり  
おもしろい事とけり  
同じからまへ

仲冬

た

此の雪はあついで  
ついでと早の道も  
おもしろい事とけり  
おもしろい事とけり  
同じからまへ

あついでと早の道も  
おもしろい事とけり  
おもしろい事とけり  
同じからまへ

仲冬

あついでと早の道も  
おもしろい事とけり  
おもしろい事とけり  
同じからまへ  
あついでと早の道も  
おもしろい事とけり  
おもしろい事とけり  
同じからまへ

仲冬

君もあついで

棟ツク  
シ

以ちて修とやく  
禁也シ

君の如き人し乃言のこむれり  
杜園

水桐ツクの如き人し乃言のこむれり  
縁去

深き地水のともみ取きりり  
俊似

つきらうてか何あむりり岸水  
陰凡

折れしゆえり紀少松山  
夜舟

茶題ツク雪舟

味くさる舟より可松木山  
嵐障

ぬりりし舟より可松木山  
荷写

白く紀なる玉珠の  
松をて修しりゆし

木の名なる松の如き  
すく磯の浪の如き

貝の如きしりりゆし  
石の如きしりりゆし

浪の如きしりりゆし  
雲の如きしりりゆし

白く松や松やよ  
むりりゆし

白く松の如きしりり  
ゆし

松をて修しりゆし  
長虹

木の名なる松の如き  
一舟

貝の如きしりりゆし  
龜洞

浪の如きしりりゆし  
合口

雲の如きしりりゆし  
忠知白石

白く松や松やよ  
亀洞

むりりゆし  
村俊

井を堀りて六日見し草  
わきしりりゆし



谷の奥にこの  
 夕陽の影を  
 火とやらに  
 火とやらに

行かして谷に宿をせし 水も山  
 海に風腸のこぼれゆく 水も山  
 山に宿の穴はさかやうに 宿も山  
 膝も山をこぼれゆく 宿も山  
 火とやらに夕陽の影を 宿も山  
 いづこか 宿も山 宿も山  
 夕陽の影を 宿も山 宿も山

歳暮

峰の奥に夕陽の影を  
 夕陽の影を 宿も山  
 火とやらに 宿も山  
 海に風腸のこぼれゆく 水も山  
 山に宿の穴はさかやうに 宿も山

夕陽の影を 宿も山  
 海に風腸のこぼれゆく 水も山  
 山に宿の穴はさかやうに 宿も山

とりのたけのまゝのたけ  
にたけのまゝのたけ  
田代のたけのまゝのたけ  
たけのまゝのたけ

たけ  
垂天田代は田代田代は田代  
たけのまゝのたけ

たけのまゝのたけ  
たけのまゝのたけ

いづれにや中い推し  
と葉子といふ

五月のふは後天宮貞記  
又二月九日始行を  
二月申のし

五月のふは橋本の御記  
水津碑

五月のふは南の御記  
水津碑

五月のふは南の御記  
水津碑

五月のふは南の御記  
水津碑

五月のふは南の御記  
水津碑

荒野集卷之六

雑

年中行莫内十二句

供扇籟白散

いそよふふやとそふを初ふ人びき

春日祭

いそよふふやとそふを初ふ人びき

石清水臨時祭

水のあはれとてははれのあはれ  
中よ水あはれ一人のあはれ  
あはれと水のあはれはあはれ  
一人のあはれとてははれのあはれ

荷今

伊勢石清水三木の葉  
廊に設明を乞ふ  
其の園宇休歇の法を  
其後法和を乞ふ  
二月十三日の日  
いつて

昨何れかの跡を村とて  
五原三多の月守年  
平 石門区治の御  
此の如く  
三月の改り  
長多全悟と略何  
柳政便友年人  
信従心  
正ん許抄

當世も志流くはたさく

洛休

いふのりわついでし

端午

たも袖を奏付

施米

いしほをたて

乞巧奠

ちりしや  
まのり  
か

定永に

ワの宮

駒込

似算も旅の子

撰虫

まのり

十月更衣

玉一

五竹

十月朔  
其の如く  
白  
乙一

秋の  
七

振江



巖微風吹袂衣袂 同卷六

不寒復不熱

海眼と松をせむるしと云ふ

池晚蓮芳謝謝 同卷六

蓮のふも切水水 同卷六

見月負來何処是容

耳唯贈北窓風風 同卷六

しらぬしとて切ぬふとて心の定

天のふるふ

抵抵大府四時心總若乾守の賜是秋天 同卷六

その旅旅をたづねてを新秋の意秋 同卷六

夜來風雨後秋氣飄然秋 同卷六

秋のつとれてはふとて心心 同卷六

暈々鏡酒初夜長長 同卷六

醉々星河映曙天

一丁子つたててをて松を七五

残影燈用燭斜光月穿牖牖 同卷六

柳ノ宿中 浮き魚子中ノ月

万杓秋霜能壞ヤブ色同叶

白茅亦やま少熟てえを秋の象

十月江南元氣好

可憐を景似を花同叶

こがしと志と一息にやま山

寂寞深村、夜半乃を中同叶

さうたれとせとぬまやをの原

同叶

師名の事  
歳時記

白次夜禮、汗を註

同叶

師名の礼を懐く白次ル

評固り一条評固兼良し

福園の嬉しむのこころ同叶

さけくまわくし

鑑鏡目之

舟泉

わけらふのよりふりつる

付石実

日月宮水鏡くまじくの衆

釣瓶紙打

かつしつわ何のくまじくの衆

糺

糺 香人 玉簪草

あふりありのまじりおきつて

馬書塔

そのはしりかた  
たはりこいふこと

こがりの木のまじりかきつて

ほくしつわくつてしつ  
海に原を江御子  
あふりたくもしよき  
あふりたつたふり  
あふりたつたふり  
あふりたつたふり  
あふりたつたふり  
あふりたつたふり  
あふりたつたふり  
あふりたつたふり  
あふりたつたふり

あふりたつたふり  
あふりたつたふり  
あふりたつたふり  
あふりたつたふり  
あふりたつたふり  
あふりたつたふり  
あふりたつたふり  
あふりたつたふり  
あふりたつたふり  
あふりたつたふり

孝夫人にお漢まじりしつ

孝夫人

一文字

武吉のりて夫人を  
あふりたつたふり

魂直何許香煙引別焚

香

かけらぬ地はけいつらぬ

白代文

揚子江の揚子江

揚貴妃

雨、野、新、晴、花

冠不物正下堂来

一文字

あふりたつたふり  
あふりたつたふり  
あふりたつたふり  
あふりたつたふり  
あふりたつたふり  
あふりたつたふり  
あふりたつたふり  
あふりたつたふり  
あふりたつたふり  
あふりたつたふり

昭陽人



上の人...  
漢書...  
西...  
又...  
社...  
...

西施...  
...

西施...  
...

小頭 鞋履 衣裳 試心

臨 眉 綉 長 外 人 不 覺 意 笑

西施

宮中 始得 娥眉 奇不 獻 吾

君 是 愛 君

尚備 啟

...

王昭君

漢書...  
昭君...  
...

玉貌 風沙 試 畫 圖

同 皇

...

...

...

...

辰

...

己

鈞 雪

これかまはるる  
たし

後新の地つづき 扇の如

午

らあふまはせしとて 扇の如

末

きよひのまはるる 扇の如

申

五月のち 扇の如

これに河内を流す人

都の宮に在る地女をけり

思はれしとて 扇の如

つづき 扇の如

これに似し 扇の如

これに似し 扇の如

地越の如

不<sup>レ</sup>なるて 扇の如

是北なり

山 流

床の角の上を流す 扇の如

樹水

扇の如

明<sup>レ</sup>なるりのちを流す 扇の如

児竹

星虫

扇の如

枝のち 扇の如

舎水

海魚

あやめく 鱒川に 魚の月

川魚

秋の暮 移月 しのぶ 魚 倉

大少の 柳月  
水あ ちり  
白く ちり  
おし

牛馬曰是是謂人落馬首

一方よ白皇是謂人 魚の首

一方を 梅に 桃の 延ぶ 人 越人

花舟に 聲を 花に 於て

謂之 固然而 夜半 有力

者 負之 而 走 曰

いふ あり 師 走り 予 に けい

絶 聖 業 知 大 道 乃 止 曰

セウ よ 物 子 ても あり あり

鏡者矢

古天後集古記

夜を 照らす あり あり 桂夕

高石河に下りて北の山に在り

中切言 帝を侍りて

同らうとて依てある

時、年二十九歳中志の

賢人を新りて名を中志とす

建武三年二月乙未

妙如の二祀宗河と

同所山の麓をたむ

師匠が利より執地

初應三年三月庚辰

武庫川に於て許せり

法然上人諸同氏佐州

編同ノ人又、河内

名源堂天台より出て

兼あや子四十一歳

二向子念一と建曆

三年正月廿六日、東山

去水、於て遷代也

二年、

純石壽

イニナナカシ

高石河のやまに在りて

藤房

高石河のやまに在りて

師五

高石河のやまに在りて

一休

高石河のやまに在りて

湍水

長江

一舟

市山

法然

高石河のやまに在りて

龍潭

山岩

高石河のやまに在りて

湍水

海岩

高石河のやまに在りて

台



眼を枯らさるるに付も  
従還、を長二十回在

を疎る鬼の獄をむよ海をん

言 咄

鬼の獄に法則し  
ま本まき

関してはまあうりまうり地

言 咄

ついでに不破の中山を  
さすしつりつり回りま月

美濃國をまのりつりつり

まきまき

まきのまきまき

まきのまきまき

まきのまきまき

松 岡

まきのまきまき

まきのまきまき

こ せ

まきのまきまき

まきのまきまき

ま ち

まきのまきまき

まきのまきまき

ま ち

まきのまきまき

まきのまきまき

ま ち

まきのまきまき

まきのまきまき

ま ち

まきのまきまき

まきのまきまき

ま ち

まきのまきまき

まきのまきまき

ま ち

まきのまきまき

まきのまきまき

ま ち

まきのまきまき

まきのまきまき

ま ち

まきのまきまき

まきのまきまき

ま ち

まきのまきまき

まきのまきまき

ま ち

まきのまきまき

まきのまきまき

ま ち

まきのまきまき

まきのまきまき

ま ち

まきのまきまき

まきのまきまき

ま ち

まきのまきまき

まきのまきまき

ま ち



水乃乃のと眼か  
又ゆふし

かふふ里を眺むる

夕楓

よのや舟をさるりもつて

一舟

れとるに舟の音りそとん

舟音

きつ川に流るる舟の音

舟音

あふみの音

あふみの音を聴きて

陰凡

らけりぬる食糧ある

冬松

移るる舟の音を聴きて

昌碧

仙臺の舟の音を聴きて

舟下

芭蕉の舟の音

福書に舟の音を聴きて

釣窓

あふみの音を聴きて

一舟

秋風よ舟の音を聴きて

舟音

舟の音を聴きて

舟音

舟の音を聴きて

舟音

貞言の舟の音

舟の音



あふりふりふりふり

ふ級の月をこころ

越人語をくまひし 野に

月より娘はしつをよつたのし

おとこをいぢうつあまの秋

秋の石よりそも秋のいふ

おとこゆつあまの秋

おとこ

樽の酒は後  
ついでに

樽の酒をよけよ秋のい 高

とついでに 高

八月よりあけし 高

よとついでに 高

ふ月 高

澤庵の暮れとあまの秋 高

おとこ 高

旅のあま 高

澤庵の酒は後  
ついでに  
大徳寺の酒は後  
ついでに  
八月よりあけし  
よとついでに  
ふ月  
澤庵の暮れとあまの秋  
おとこ  
旅のあま



き解を

あはれにたつた<sup>松</sup>き<sup>松</sup>破り<sup>松</sup>果の<sup>松</sup>院<sup>松</sup>

さくさく<sup>松</sup>い<sup>松</sup>あ<sup>松</sup>く<sup>松</sup>も<sup>松</sup>食<sup>松</sup>は<sup>松</sup>

高麗を

父母の<sup>松</sup>ま<sup>松</sup>う<sup>松</sup>は<sup>松</sup>一<sup>松</sup>旅<sup>松</sup>の<sup>松</sup>ま<sup>松</sup>

あや<sup>松</sup>き<sup>松</sup>さ<sup>松</sup>う<sup>松</sup>ち<sup>松</sup>き<sup>松</sup>さ<sup>松</sup>う<sup>松</sup>つ<sup>松</sup>ま<sup>松</sup>は<sup>松</sup>

さ<sup>松</sup>う<sup>松</sup>又<sup>松</sup>は<sup>松</sup>も<sup>松</sup>あ<sup>松</sup>ら<sup>松</sup>う<sup>松</sup>一<sup>松</sup>盤<sup>松</sup>

一<sup>松</sup>を<sup>松</sup>の<sup>松</sup>あ<sup>松</sup>も<sup>松</sup>あ<sup>松</sup>ら<sup>松</sup>う<sup>松</sup>は<sup>松</sup>い<sup>松</sup>は<sup>松</sup>昔<sup>松</sup>雨<sup>松</sup>

長舟停正

あ<sup>松</sup>ら<sup>松</sup>う<sup>松</sup>は<sup>松</sup>い<sup>松</sup>は<sup>松</sup>

山<sup>松</sup>の<sup>松</sup>ま<sup>松</sup>う<sup>松</sup>は<sup>松</sup>

父<sup>松</sup>の<sup>松</sup>ま<sup>松</sup>う<sup>松</sup>は<sup>松</sup>

あ<sup>松</sup>ら<sup>松</sup>う<sup>松</sup>は<sup>松</sup>

信<sup>松</sup>じ<sup>松</sup>を<sup>松</sup>登<sup>松</sup>つ<sup>松</sup>ま<sup>松</sup>は<sup>松</sup>

父母<sup>松</sup>を<sup>松</sup>一<sup>松</sup>ま<sup>松</sup>は<sup>松</sup>

肩<sup>松</sup>を<sup>松</sup>と<sup>松</sup>流<sup>松</sup>る<sup>松</sup>も<sup>松</sup>ゆ<sup>松</sup>も<sup>松</sup>た<sup>松</sup>の<sup>松</sup>ま<sup>松</sup>  
心<sup>松</sup>を<sup>松</sup>一<sup>松</sup>や<sup>松</sup>白<sup>松</sup>髪<sup>松</sup>の<sup>松</sup>あ<sup>松</sup>ら<sup>松</sup>う<sup>松</sup>は<sup>松</sup>い<sup>松</sup>は<sup>松</sup>松<sup>松</sup>本<sup>松</sup>を<sup>松</sup>

九月十日まふまのちてし

か<sup>松</sup>ら<sup>松</sup>う<sup>松</sup>は<sup>松</sup>い<sup>松</sup>は<sup>松</sup>あ<sup>松</sup>ら<sup>松</sup>う<sup>松</sup>は<sup>松</sup>い<sup>松</sup>は<sup>松</sup>松<sup>松</sup>本<sup>松</sup>の<sup>松</sup>中<sup>松</sup>を<sup>松</sup>流<sup>松</sup>る<sup>松</sup>ま<sup>松</sup>

う<sup>松</sup>り<sup>松</sup>か<sup>松</sup>ら<sup>松</sup>う<sup>松</sup>は<sup>松</sup>い<sup>松</sup>は<sup>松</sup>あ<sup>松</sup>ら<sup>松</sup>う<sup>松</sup>は<sup>松</sup>い<sup>松</sup>は<sup>松</sup>松<sup>松</sup>本<sup>松</sup>の<sup>松</sup>中<sup>松</sup>を<sup>松</sup>流<sup>松</sup>る<sup>松</sup>ま<sup>松</sup>

人のつらうをいふまじ

ま<sup>松</sup>ら<sup>松</sup>う<sup>松</sup>は<sup>松</sup>い<sup>松</sup>は<sup>松</sup>あ<sup>松</sup>ら<sup>松</sup>う<sup>松</sup>は<sup>松</sup>い<sup>松</sup>は<sup>松</sup>松<sup>松</sup>本<sup>松</sup>の<sup>松</sup>中<sup>松</sup>を<sup>松</sup>流<sup>松</sup>る<sup>松</sup>ま<sup>松</sup>

ゆらうの人まふまのちてし

三州伊良吉崎杜園

あ<sup>松</sup>ら<sup>松</sup>う<sup>松</sup>は<sup>松</sup>い<sup>松</sup>は<sup>松</sup>

信<sup>松</sup>じ<sup>松</sup>を<sup>松</sup>登<sup>松</sup>つ<sup>松</sup>ま<sup>松</sup>は<sup>松</sup>

浪江の常あつた

曾子の申を川にゆふ

杜國

右馬政あつた人お枝の  
女お枝こころしお枝を  
くら砥つたを命し  
し

こがりの屋敷あつたおゆい  
瑞合を建去をこころし  
あつたをこころしおゆい  
あつたをこころしおゆい

越人

杜國の羅をこころし

こころしおゆい  
おゆいおゆい  
おゆいおゆい  
おゆいおゆい

あつたをこころしおゆい  
あつたをこころしおゆい  
あつたをこころしおゆい  
あつたをこころしおゆい

荷守

あつたをこころし

あつたをこころし

あつたをこころしおゆい  
あつたをこころしおゆい  
あつたをこころしおゆい  
あつたをこころしおゆい

嵐彈

恋

りしわ  
連後のわ

一  
し

いしわ  
おゆいおゆい  
おゆいおゆい  
おゆいおゆい

越人

恋

あつたをこころしおゆい  
あつたをこころしおゆい  
あつたをこころしおゆい  
あつたをこころしおゆい

一  
し

巨匠

あつたー姉

くさくさ

はくはく

草の

堀川

まぬしや余のまじりし時多

除風

敵をわすれぬと又えふあつた

去也

と一干り国を松城より

文調

此に袖をくさるる女公子

文

こけりし妹の城より

心棘

六宮粉黛無顔色

長恨歌

あやしの編みかけは月の顔

長虹

つゝあつた人約あつた

尚白

まじり

つゝあつた

高宇

あつた

小春

事の

越人

松の

俊似

物おもしろ

舟泉

くさくさ

嵐表

心細

松芳

あつた

諸邪

あつた

あつた

あつた

あつた



三ノ子育の秋懐強ト

入して行きの人とも  
昔の自より名付たるを  
降るにや

又存え七月三日迄  
名付集、追悼一  
子育の秋懐強ト

市原地いそ布野のト  
少き夜の南ト

巧みとの元とゆふ  
秋風吹よつたけもあはつて  
あはれいそ  
そとええ  
死なぬを

世と名わく妻のあはれはくはくは

水毎月の桐の一葉をさかしく  
三ノ子育

三ノ子育

あはれいそいそいそ  
あはれいそいそいそ

あはれいそいそいそ

あはれいそいそいそ  
あはれいそいそいそ

あはれいそいそいそ

あはれいそいそいそ  
あはれいそいそいそ

秋風吹よつたけもあはつて

三ノ子育

三ノ子育

あはれいそいそいそ  
あはれいそいそいそ

あはれいそいそいそ  
あはれいそいそいそ

あはれいそいそいそ

あはれいそいそいそ  
あはれいそいそいそ

あはれいそいそいそ

あはれいそいそいそ  
あはれいそいそいそ

あはれいそいそいそ

けい

あつし 運子 松

鬼火おの事 遊覧

あつし 松

あつし 松

あつし 松

あつし 松

あつし 松

あつし 松

あつし 松

あつし 松

おれん子 松

あつし 松

あつし 松

あつし 松

あつし 松

あつし 松

三換のり人 松

今集

神田の松

松

西人

曠野集 卷之八

釋教

いせし

多岐山 松

双松

松

松

松

松

釋教

神田 松

松

西行上人 松

松

松



連翹ヤスササハモウシクニシノコリク 胡カ及

ししノコノコノニ王シ山ノ 杉ノ

木ノ皮ノハモウシクニシノコリク 杉ノ

ほノノコノニ角ノ

そノノコノニ角ノ

ちノノコノニ角ノ

乃ノハモウシクニシノコリク

山ノノコノニ角ノ

連ノノコノニ角ノ

倒ノノコノニ角ノ

魚ノノコノニ角ノ

乃ノハモウシクニシノコリク

胡カ

松ノ

角ノ

角ノ

角ノ

ひノノコノニ角ノ

龍ノノコノニ角ノ

右ノノコノニ角ノ

ハノノコノニ角ノ

海ノノコノニ角ノ

頃ノノコノニ角ノ

乃ノハモウシクニシノコリク

ある龍女成体ノハモウシクニシノコリク

俊ノ

一ノ

千ノ

一ノ

一ノ

乃ノハモウシクニシノコリク

龍女一ノハモウシクニシノコリク

乃ノハモウシクニシノコリク

胡カ

松ノ

角ノ

角ノ

角ノ

乃ノハモウシクニシノコリク

乃ノハモウシクニシノコリク

衣底印り

大和良子

流傳のりも奉良子  
こりこ訪けし  
麻の子もこいを  
つてけりおいて  
もうらなれい

流傳のりも奉良子  
流傳のりも奉良子  
流傳のりも奉良子

大和良子  
大和良子  
大和良子

白

表衣白塗平結  
更衣の時着て

腰りあかさし  
礼をさうの  
山山

一宮

十如足

相性體作因縁  
果報本末(元意)

女とて巻一  
り清水山

一笑

十如足

ちふとふんて  
通る清水山

荷今

即身即佛

五ヶの身も  
再々たるの  
行止

愚童

ちふはら  
わゆる衣

鼠群

おろろ  
おんを

荷今

おろろ  
おんを

探丸

石  
養ふ

文里

魂  
おん

龜洞

た  
おん

ト枝

折掛燈籠

石籠

蛇籠  
石籠  
水陸

接待のていりふんを以ての儀 御を

平ホ施一切 日向文

接待のていりふんを以ての儀 御を

接待のていりふんを以ての儀 御を

接待のていりふんを以ての儀 御を

侍とあるもの、侍と  
ありて肉をくらひぬ  
つよとつよと  
け向と王の事を  
つくはあふん

あふん四時の量物こそ水物と  
勢こそ不食なりこそ感じ  
そと乃こそくらひぬ

乃とぬら侍あふんあり 荷字

新飯の意

浪たふふ、中四

右靴ははふれい  
よりて、行りう  
て、行

けこそあふんをつ  
くわとこころを  
あてこころを

せふふれいも  
秋とよふあふん

托鉢の儀、託鉢の  
うへとこころを  
つよ

右園師とて日蓮上人  
を割作、あふん  
はまふ谷とてあふん  
あふん

あふんより自り

燕も湧りたる、鼓之、こころ 頁角

あふん、坊とけう、十月、舟 一舟

鉢の子とあふんを、うへ、後、舟 卜枝

人のあふん、あふん、あふん

衣、あふん、あふん、一、舟、扇、弾

聴、今、あふん、あふん

たう、あふん、あふん、あふん、越人

伽藍ハ檀香の  
林花也

古寺のつら

暇也 伽藍の  
の香を録 荷兮

吾子と眠とありむ

同

空打わりのもと玉の片腕カサ 後似

敏負りあし初め三升を つくろくをくこいれをきしや仏 一升

在後げ子由進ひの徳を 影るふ丁人のさいつわ 文間

つとまふり人をもるを 千観の馬もかせりし 尺角

世急報りして怒る 桑玉品七句

予所たれ微笑を 法を録し

心い神とあり

父母より欲まうしてあ

如寒者得火

るふしれ千観しきりし

如禪者得衣

つとまふりしつかりあり

如高人得三

かのらちを助家と云

如子得母

例ゆりし知らん

竹ふくくす片れつまけれ

如後得取

月の夜露の極石体

如後得取

かゝるははたえける心

如後得取

秋の月夜露の極石体

胸のよきとけいはいの  
あひかりとて 願ふ

神祇

ちとわを けい きあの水を子 和らび 的也

二月廿五日の納

ちとわを けい きあの水を子 和らび 荷令

ちとわを けい きあの水を子 和らび 同

ちとわを けい きあの水を子 和らび 亀洞

ちとわを けい きあの水を子 和らび 昌瑞石

ちとわを けい きあの水を子 和らび 石

神祇

花を けい きあの水を子 和らび  
い月夜露の極石体  
天竺土神天の石室に入り  
盤を けい きあの水を子 和らび  
こ同 けい きあの水を子 和らび  
花を けい きあの水を子 和らび  
花を けい きあの水を子 和らび

家の後宮の...  
のうとうと...  
休...  
二宮尾張)

何れかうあつて... 梅の...  
... 梅の...  
... 梅の...  
... 梅の...  
... 梅の...  
... 梅の...  
... 梅の...  
... 梅の...

玄察  
龜洞  
末字  
荷今  
尚白  
松立  
落格

お火事  
照  
あつた  
世に...  
世に...  
世に...

十月

宮...  
少...

お火事... 世に...  
... 梅の...  
... 梅の...  
... 梅の...  
... 梅の...  
... 梅の...  
... 梅の...  
... 梅の...

玄察  
龜洞  
末字  
荷今  
尚白  
松立  
落格

若宮奉納

祝

言砂の徳

久しき世の社を

夜ついでにまき

かつらり社あり

まじりし人なり

まじりし人なり

社あり

肩衝(茶壺)

とてせられたい

社あり

社あり

言えぬまも妙也神々

源のふと宿まは

社あり

社あり

橋杭やは後くる

祝

肩衝

社あり

利京

野水

昌碧

村俊

卜枝

空文

玉枝(日本)

子代

社あり

社あり

社あり

正本

社あり

社あり

社あり

火玉

天の代

草

い

子代

志

先

王代

此は  
此は  
此は  
此は  
此は  
此は  
此は  
此は  
此は  
此は



曠野集負外

東四州の東敵の敵と

四州のふり起す

依川内を三井森の長外  
代々依川内を三と云き後継  
言名昌俊より山成回宗の星  
と記す

心よかりし年々の白き  
よりの心をあらしむしけり  
を來れり  
かきしんしをいひのあし  
きりふしはきりあし  
とめあをいひしをいひ

頁外

誰か母を好むをたれ  
市井にあらしむるのり  
と記す 東四州の東敵の敵と  
三井森の長外  
代々依川内を三と云き後継  
言名昌俊より山成回宗の星  
と記す  
かきしんしをいひのあし  
きりふしはきりあし  
とめあをいひしをいひ  
けり 依川内を三と云き後継  
言名昌俊より山成回宗の星  
と記す



一昔と春を打心  
積時  
これいふはまはるを  
ひきかへしつゝふり  
二番うらむとてふり

け子自も大草の  
おのゝよふたは  
張るゝとらふ

武子の三層うつとをたはし  
ちをうらむついで 遊のつと  
付家う 福とてふり 子のと  
はふ 陣うらむとてふり 西  
まうら 招くはまう 万の路  
千句うらむとてふり たり  
たさ 水うらむとてふり 路  
あて てもふり 二月の路  
水 人 今 水 人 今 水 人

流しゆはまのり  
う 登人と断る

秋 師のから  
魚

一 秋のまに 流るやうおら 物あり  
秋をたはむとて 登人の書  
ひ ちうらむとて 舟のき  
さおら ありたら 利根の川舟  
おのゝまのり して ちをたはむ  
魚子よらむとて ね 遊うらむ  
あうらむとて ちをたはむ ちをたはむ  
あうらむとて ちをたはむ ちをたはむ  
人 今 水 人 今 水 人 今 水 人

成三白

酒氏ら集下

其の故らるるも  
きいもつらむいけ  
かゝるるもつらむいけ  
下所

柏木左門の吉重  
同人の鞠の巻

酒柳のかり柳

けこ

不破の休も美次郎の  
小此とるも悲

不破の巻作

ひあ

不破は徳州のの吉物と  
火の巻の巻もつらむいけ  
も良川の秋もつらむいけ

柏木の脚巻の比のつらむいけ

さむくつらむいけのつらむいけ

月の影より食らむつらむいけ

秋よあつらむいけのつらむいけ

あつらむいけのつらむいけ

ふれつらむいけのつらむいけ

かこつらむいけのつらむいけ

かこつらむいけのつらむいけ

水

人

水

人

水

人

水

人

かこつらむいけ

魚巻の巻

古人のつらむいけ

人のつらむいけ

つらむいけ

つらむいけ

つらむいけ

つらむいけ

つらむいけ

つらむいけ

かこつらむいけ

かこつらむいけ

かこつらむいけ

かこつらむいけ

かこつらむいけ

かこつらむいけ

かこつらむいけ

人 水 人 水 人 水

ちりちりちりちり  
ちりちりちりちり  
ちりちりちりちり  
ちりちりちりちり

標

まじりし浪よをまじりし

たしりし舟よりしりし

りしりしわがしりし

百りしりしラテしりし

しりしりしりしりし

ちりしりしりしりし

龜洞

荷子

昌石

水

舟

洞

たらしめられし  
たれこれいふ  
御ついで  
ついでに

花の香りとともなるあまの  
筆

一駄をこしこれ七右師  
龜洞

その色にまじりたる福を麻  
荷弓

あすはけはねあまの  
昌礫

いづつあまのついで  
釣宮

河原やうのそと  
舟泉

こゝろと志をくく月  
望水

こゝろをわいす月  
荷弓

けい云

女車に程先朝の

ま事をしりて  
こゝろをわいす

車と引くまをわいす  
あまのついで

あまのついで  
次の句

秋を別の年を  
引くこれ七右師

あまのついで  
あまのついで

あまのついで  
あまのついで

あまのついで  
あまのついで

あまのついで  
あまのついで

秋風よ女車より影けをこ  
名水洞

神をわいす  
釣宮

あまのついで  
昌礫

あまのついで  
望水

あまのついで  
舟泉

あまのついで  
龜洞

あまのついで  
荷弓

あまのついで  
昌礫

この山は門徒の事

（三）

此山を二泉の山と云ふ  
釣堂

此山を二泉の山と云ふ  
舟泉

此山を二泉の山と云ふ  
明水

此山を二泉の山と云ふ  
荷亭

此山を二泉の山と云ふ  
亀洞

此山を二泉の山と云ふ  
釣堂

此山を二泉の山と云ふ  
昌石

此山を二泉の山と云ふ  
那水

小川を日蓮上人  
詠ふ

（一）

つとふもたふも  
舟泉

水もたふも  
亀洞

五のりもたふも  
何亭

柳のりもたふも  
昌石

人をもたふも  
釣堂

ついたつとも  
那水

（四）

卵カヒト

カヒト

中カヒ蛸カヒ 俗カヒヲカヒケカヒフカヒクカヒシカヒト

カチキリリカヒシカヒセカヒナカヒシカヒ後

又ハカヒれカヒ子カヒ夜カヒ夜カヒとカヒりカヒト

ツカヒクカヒトカヒ也カヒ教カヒ祖カヒのカヒ後カヒハ

ケカヒ一カヒ云カヒ

諸カヒ江カヒ南カヒのカヒ句カヒトカヒ相カヒ撲カヒッ

起カヒ原カヒをカヒとカヒくカヒ 駁カヒ言カヒシ

起カヒ原カヒのカヒ句カヒト

そカヒ句カヒトカヒのカヒ句カヒトカヒとカヒしカヒ 諸カヒ江カヒのカヒ句カヒトカヒ

員カヒ一カヒ小カヒ龍カヒとカヒりカヒノカヒ一カヒ季カヒのカヒ水

柳カヒのカヒ一カヒ季カヒのカヒ卵カヒ

ツカヒクカヒトカヒ也カヒ 樹カヒ附カヒト

キカヒクカヒトカヒ也カヒ 一カヒ季カヒのカヒ水

秋カヒのカヒ一カヒ季カヒのカヒ水

一カヒ季カヒのカヒ水

舟泉

松カヒ方

文

荷カヒ方

松カヒ方

舟泉



りふも又も  
 りふも又も  
 諸君に  
 誓せし

りふも又もあきらむ  
 ちよあし砂の中にあつし  
 火鼠のぼろ衣をばき  
 派つとてしつる笑日  
 ころころとつらつら  
 酒の半と睨もつらつら  
 幾年を嘆れり  
 よよよとみちのち

荷方  
 之文  
 舟泉  
 松芳  
 荷方  
 松芳  
 舟泉

花の白く  
 花の白く  
 花の白く

眼も一瞬も  
 還休し  
 十の日は

ふらふらと  
 月のねらふ  
 灯は  
 改  
 修  
 十の日は  
 山星  
 若

花の白く  
 花の白く  
 花の白く

舟泉  
 松芳  
 舟泉  
 松芳  
 舟泉  
 松芳  
 舟泉

あふついかふふ

法花経

こふとくはなをよほす月め能  
 荷兮  
 馬の通るはつるのいあふ  
 冬文  
 舟一と金斤の定めその内  
 舟泉  
 上り流ぬこくて着るあふあ  
 松芳  
 つくしと流るる方のいあふ  
 冬文  
 曉妙の堤はのいあふ  
 荷兮  
 川のいあふをいあふ  
 松芳  
 味あふのいあふ  
 舟泉

赤見いあふの扱こ貝  
 赤見いあふの扱こ貝  
 赤見いあふの扱こ貝  
 赤見いあふの扱こ貝  
 赤見いあふの扱こ貝

貴族のいあふをいあふ  
 荷兮  
 次をいあふをいあふ  
 冬文  
 上をいあふをいあふ  
 舟泉  
 上をいあふをいあふ  
 松芳  
 上をいあふをいあふ  
 冬文  
 上をいあふをいあふ  
 舟泉

雨のふりしむる

中いぬむのちも

春にけしむる

故の雨のふりしむる

所

けこ云

けこ云をかんや車

けこ云をかんや車

けこ云をかんや車

けこ云をかんや車

なななななななななな

荷字

雨のりりりりりりりり

水

いんげん車に

同

あささささささささ

荷字

月の秋旅の

同

一すけにふし

水

大和長谷

遺戸部の実張本  
衝張 ヲツハリノコトナリ  
通いぬより一歩近  
ソセ物行の傍  
大和長谷の  
所

初あしーらつきの寮の傍に  
菓畑あふれり  
む肥をとりし  
下別れ  
通りついでに  
六位ありし  
代よりおとし  
鏡 一  
水 台 台 水 台 台

和名抄

木天蓼

和人の位多々の  
人

月の影をば  
草咲くし  
天竺  
うけうみけ  
たし  
よせを  
駒の  
秋の  
水 台 台 水 台 台

先んていふもいふもいふもいふも  
 八の月のついでにいふもいふも  
 山のついでにいふもいふもいふも  
 さいはふいふもいふもいふもいふも  
 是きりも後けさるる門路も  
 太くもいふもいふもいふもいふも  
 こゝろもいふもいふもいふもいふも  
 さいはふいふもいふもいふもいふも

水 寺 水 寺 水 寺 水

けいふいふもいふもいふもいふも  
 けいふいふもいふもいふもいふも  
 けいふいふもいふもいふもいふも  
 けいふいふもいふもいふもいふも  
 けいふいふもいふもいふもいふも  
 けいふいふもいふもいふもいふも  
 けいふいふもいふもいふもいふも  
 けいふいふもいふもいふもいふも  
 けいふいふもいふもいふもいふも  
 けいふいふもいふもいふもいふも

水 寺 水 寺 水 寺 水

二の地の地

夫木を  
方の夜ゆえうき  
まを月をふあ  
うらうら

誦

月一のちりり  
わらわら  
とに  
方の夜ゆえうき  
まを月をふあ  
うらうら

月一  
たき  
たけ

越人

命

同

人

同

樽のたし

六  
家  
あつ

あれこれ梅の子を尋ねて

こころもあはれ<sup>あは</sup>い

こころがうきよめあつて

あはれ<sup>あは</sup>い

大智の人よ法華をい

月の夕に 沙羅繩に

ふみ村も又ふるも

秋のききれ 細かな

筆

下

人

同

人

同

下

人

人 同 下 同 人

花の笑は付まの

源氏細流はけし

二月と生きたる

ひたひたを詠す

七月より十二月に

生きたる人の

涙を詠す

ワタシもつひは世をわく

病をうつ書ふ又

花の笑はけし

ききれ 舞の

ころをこれと

ゆきこころ

酔きたの

花を詠す

同

下

人

同

人

同

下

人

同

人

同

人





此の詞をよみ元祿三年より元祿九年迄あり

いふはちやもとをいふやの  
つらねこ ちやうをすり  
かゝるは

驚きもやとつふけを  
一向のつらねをす  
物まじりたつらねを  
いふはちやもといふ  
和名、南恵のこころ  
アキハコといふ

新章のちや  
はむす  
程をいふ  
下り

### 深川の夜

越人

|             |          |           |           |
|-------------|----------|-----------|-----------|
| いふはちやもといふやの | つらねこ     | ちやうをすり    | かゝるは      |
| 驚きもやとつふけを   | 一向のつらねをす | 物まじりたつらねを | いふはちやもといふ |
| 和名、南恵のこころ   | アキハコといふ  |           |           |
| 新章のちや       | はむす      | 程をいふ      | 下り        |
| 風よ好くし       | 海を舟人     |           |           |
| 越人          | 台        | 台         | 台         |
| 越人          | 台        | 台         | 台         |

下待日

長安古井右利地

定子急行路程

長安の只繁花の

土地といふこと

田

田

まき

何士の四家

又

源氏ゆかりとれ

ゆかりとれ

か

下

下

旅

旅

伸

伸

言

下

下

か  
長安の只繁花の  
土地といふこと

田  
田

田  
田

田  
田

田  
田

田  
田

田  
田

田  
田

田  
田

田  
田

田  
田

田  
田

田  
田

田  
田

田  
田

田  
田

一 木は西花と申し  
 シフと云ふは木に  
 木を言ふは  
 け句は句或は  
 山は山  
 木は木  
 心は心  
 け句は句或は  
 山は山  
 木は木  
 心は心

人をいふは  
 木は木  
 心は心  
 け句は句或は  
 山は山  
 木は木  
 心は心

人 人 人 人 人

木は木  
 心は心  
 け句は句或は  
 山は山  
 木は木  
 心は心

秋の四  
 木は木  
 心は心  
 け句は句或は  
 山は山  
 木は木  
 心は心

人 人 人 人

若今の心を紙へ

まらあしここれら

句を一時す真にあり

せいのうれほを

言のつらうをせん

原上をめぐり

あし得ふをてあ人の

あつふし知し

あしと荷さうあやれば

こおさう月をふまう

あしあしのたをうけつて

のしとつあしとあしあし

あしとあしあしあし

あしとあしあしあし

其角

紙へ

台

角

台

人

あしとあしあし

あしとあしあし

都の秋の夕暮を  
こし

あつたあつたの  
さくらさくら

え都とつと徳都  
さつさつと人

三つあつたあつた  
さつさつと人

あつたあつた  
さつさつと人

あつたあつた  
さつさつと人

あつたあつた  
さつさつと人

ほろ洞あつたあつた

都のあつたあつた

空のあつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

人 台 角 台 人 台 角 台 人

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

人 台 角 台 人 台 角 台 人

剛にせし  
皇門を  
宮一十竹如  
一ノ母家の  
終るに月報  
ゆ月もあま  
皆終りの  
一報に終る

や、あまの  
羊て  
月物  
い  
宮  
ひ  
ゆ  
辰

人 全 角 全 人 全 角 全

不  
白  
念  
付  
い  
念  
言

リ  
う  
取  
ま  
ま  
ま  
ま

全 全 人 全 前 全

嘸  
尾  
カ

ま  
ま  
ま  
ま  
ま  
ま  
ま

全

けりけりせりせりせりせり  
よふやまこころをきかぬ  
人のこころをきかぬ  
たぐひのたぐひ

弘安五年 法蓮

弘安五年 法蓮  
弘安五年 法蓮  
弘安五年 法蓮  
弘安五年 法蓮  
弘安五年 法蓮  
弘安五年 法蓮  
弘安五年 法蓮  
弘安五年 法蓮  
弘安五年 法蓮  
弘安五年 法蓮

弘安五年 法蓮

山嵐を

秋こそ空を渡る鳥の跡  
越人

月の宿をきかぬ  
左

弘安五年 法蓮  
左

弘安五年 法蓮  
左

弘安五年 法蓮  
人







ねがし...  
川...

せこ...  
...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

川...  
...

...

...

...

...

...

...

...

水 楮 水 楮 水 楮 水 楮

...

...

...

...

...

...

...

...

水 楮 水 同 楮 水 楮 水

何事をもていふて相  
かきしとていふていふ

けりて大和物語の

ね女を引くあふく

ね女のあつてもあふ

さるうし初中の二句を

か女のさるうし四句を

つれづれいふていふ

そと  
た

さるうし初中の二句を  
か女のさるうし四句を

つれづれいふていふ

さるうし初中の二句を  
か女のさるうし四句を

何事をもていふて相  
かきしとていふていふ

けりて大和物語の  
ね女を引くあふく

ね女のあつてもあふ  
さるうし初中の二句を

か女のさるうし四句を  
つれづれいふていふ

さるうし初中の二句を  
か女のさるうし四句を

つれづれいふていふ

さるうし初中の二句を  
か女のさるうし四句を

つれづれいふていふ

格 同 水 格 水 格 水 格

ませまのいふていふて相  
かきしとていふていふ

けりて大和物語の  
ね女を引くあふく

ね女のあつてもあふ  
さるうし初中の二句を

か女のさるうし四句を  
つれづれいふていふ

さるうし初中の二句を  
か女のさるうし四句を

つれづれいふていふ

さるうし初中の二句を  
か女のさるうし四句を

つれづれいふていふ

さるうし初中の二句を  
か女のさるうし四句を

つれづれいふていふ

格 水 同 格 水 格

右神中抄の記

さるうし初中の二句を  
か女のさるうし四句を  
つれづれいふていふ  
さるうし初中の二句を  
か女のさるうし四句を  
つれづれいふていふ  
さるうし初中の二句を  
か女のさるうし四句を  
つれづれいふていふ

文字集 和名 俗用

葛 福草 幸種

葛をいふも 葛をいふも 三枚亦も 梅をいふも 又ははも 三枚をいふも  
ひびく 葛をいふも 葛をいふも 葛をいふも 葛をいふも 葛をいふも

この飯も 葛をいふも 葛をいふも 葛をいふも 葛をいふも 葛をいふも  
これいふ物と 核は葛の肉也

葛の肉は 葛の肉は 葛の肉は 葛の肉は 葛の肉は 葛の肉は  
葛の肉は 葛の肉は 葛の肉は 葛の肉は 葛の肉は 葛の肉は

葛の肉は 葛の肉は 葛の肉は 葛の肉は 葛の肉は 葛の肉は  
葛の肉は 葛の肉は 葛の肉は 葛の肉は 葛の肉は 葛の肉は

葛の肉は 葛の肉は 葛の肉は 葛の肉は 葛の肉は 葛の肉は  
葛の肉は 葛の肉は 葛の肉は 葛の肉は 葛の肉は 葛の肉は

一升

一里の山 葛をいふも 葛をいふも 葛をいふも 葛をいふも 葛をいふも

かきいふ 葛の 瓶也 葛 瓶

葛をいふ 葛をいふ 葛をいふ 葛をいふ 葛をいふ 葛をいふ

葛をいふ 葛をいふ 葛をいふ 葛をいふ 葛をいふ 葛をいふ

葛をいふ 葛をいふ 葛をいふ 葛をいふ 葛をいふ 葛をいふ

葛をいふ 葛をいふ 葛をいふ 葛をいふ 葛をいふ 葛をいふ

コノコナ

解 葛をいふも 葛をいふも 葛をいふも 葛をいふも 葛をいふも 葛をいふも



二五下ありしを  
 改教とすとす  
 入取の文を  
 改修希の娘を  
 女子入取の証を  
 之上より位はと  
 一して改修を

本をいひあつてし  
 秤よりりる  
 け年よりあつて  
 ほくもせんとい  
 是として  
 こまか  
 洗  
 衣  
 長  
 嵐  
 一  
 胡  
 及

之れをいひて入  
 中集  
 親王方教  
 後二親  
 入取  
 二親  
 二五下ありしを  
 改教とすとす

毒  
 風  
 板  
 ぬ  
 入  
 長  
 胡  
 及

季成

夫能世々部集の江新也  
先哲の遺言を以て  
江に於て玉の如きもの  
ゆれば其の多きを教へ  
り毎況の如きもの  
あやう憤念を改むる  
割 其の如きもの

しほしほ物ふりまじたり  
いふはつらきことしほしほ  
あやゆされしとけのほのほ  
まゝ元祿のまじりて許さず  
いふはつらきことしほしほ  
まじりて許さず  
いふはつらきことしほしほ  
まじりて許さず  
いふはつらきことしほしほ  
まじりて許さず

しほしほ物ふりまじたり  
いふはつらきことしほしほ  
あやゆされしとけのほのほ  
まゝ元祿のまじりて許さず  
いふはつらきことしほしほ  
まじりて許さず  
いふはつらきことしほしほ  
まじりて許さず  
いふはつらきことしほしほ  
まじりて許さず  
いふはつらきことしほしほ  
まじりて許さず



己付てふら月あつて今ふたは  
こゝに見えぬもの 確実なるれ 予  
得言有るは( )とていふは  
たふ交情を( )とていふは  
貴も記を( )とていふは  
志( )とていふは( )とていふは  
平ぬ( )とていふは( )とていふは  
志( )とていふは( )とていふは

信又の( )とていふは( )とていふは  
既( )とていふは( )とていふは

明治甲戌

乙卯の( )とていふは



